［制作記録］

日本画を学ぶ学生の西安・敦煌研修旅行

Xian Tunhuang Study Tour of the Student Who Learns a Japanese Painting

荒木　恵信
ARAKI Keishin

はじめに

日本画専攻では、隔年に研修旅行を実施している。学部3年生と4年生とが一緒になり、30名の一団としておよそ4泊5日の行程を共にする。2019年度は筆者の担当であり、4月1日から5日にかけて中華人民共和国 西安と敦煌を訪れた。筆者の専門性を活かして、大学の研修旅行だからこそ経験できる特別な学習の機会をつくりたいと強く願い、実現に向けて学生と共に計画したのである。特に、敦煌では敦煌研究院美術研究所（以下、研究院）との連携により、非常に有意義な見学と交流会を催して頂いた。

見聞を海外へも広めることは、日本画ひいては美術・芸術を学ぶうえで決してマイナスにはならない。学生の中にはこの研修旅行で始めてパスポートを取得し、出入国審査を経験する者も少なくない。異国に立ち、その土地の文化に戸惑いながらも他言語の人たちと会話し、初めての景色に驚いたり珍味に舌鼓を打ったりしたことは、新たな見地の萌芽であり、人生を豊かにする糧となる。かけがえのない学友との思い出をつくる絶好の機会とも言えよう。

本稿では、研修旅行の行程を紹介するとともに、研究院との交流会の意義を改めて確認しつつ、今後の展開を模索する礎としたい。

出国、西安へ

4月1日（月）午前11時に小松空港を発ち、上海浦東国際空港にて乗り継ぎし、午後8時に西安空港へ到着。翌朝7時30分から見学をはじめる。

西安はシルクロードの起点であり、かつて長安と称された。明代の姿を止める国内唯一の城壁がある。最初の見学地はその西門、安定門である（図1）。その後、慈恩寺で大雁塔[1]を見上げ、玄奘三蔵に思いを馳せる（図2）。西安で最も時間を割いたのは、秦始皇兵馬俑博物館である（図3）。死後の始皇帝を守る実物大の大部隊を是非、学生に体感して欲しかった。もちろん精巧に造られた銅車馬も見逃せない（図4）。

この見学の後、西安空港から敦煌空港へ向かう長時間のフライト。途中、嘉峪関空港でトランジット。

充実の敦煌

3日目は、研修旅行のメインとなる莫高窟の見学と研究院との交流会である。

莫高窟には、492もある石窟に北涼時代から元時代までの壁画がのこる。日本画を学ぶ者にとって憧れの遺構のひとつである。筆者が学生時に訪れて感じた、大地の広大さと歴史の深さへの驚愕、日本画の源流をみた歓喜などを学生にも感じてもらえればうれしい限りである。

さて、この貴重な文化遺産を調査研究し、保存と公開、活用の重責を担っているのが、研究院である。我々を快くお迎えくださった院長様、美術研究所 韓卫盟先生、私どもと連絡を取って様々な調整をしてくださった明慧先生、研究院全ての方に深く感謝しているところである。

莫高窟の見学は、莫高窟からかなり離れた場所に建つ映像館から始まる（図5）。巨大スクリーンに映し出される映画で莫高窟の概要を理解した後、専用バスに15分ほど乗車すると莫高窟に到着。そこから日本語ガイドの案内で窟内を見学する（図6～10）。今回特別に18窟もの見学許可をいただき、壁画を堪

［キーワード］世界遺産　文化財　模写

能した（一般のツーリストの場合、5窟くらいである）。第57窟、第220窟の見学などは夢の様なひとときであった。古画や仏画に親しみの薄い学生も窟内に立てば、篤い信仰心と絵画の技量、歴史の深さに圧倒されたことだろう。

早朝から午後4時までたっぷりと見学し、その後研究院へ移動して交流会を行った（図11）。韩卫盟先生にご案内いただき、模写の様子と研究者が制作した現代の作品を鑑賞した（図12〜13）。交流の証として作品の図録を頂戴した（図14）。相互の発表では、はじめに筆者が本学日本画専攻の紹介と自身の模写研究を報告した（図15）。引き続き韩卫盟先生による研究院の歴史や活動に関するご報告を拝聴した（図16〜17）。過密なスケジュールだったが、芸術を介した交流は、今後の展開を孕む非常に貴重な素晴らしい機会となった（図18）。

研究院の皆様とお別れし、我々は鳴沙山、月牙泉へと向かった（図19-20）。そこでは駱駝に乗り、砂漠を踏んで進む体験をした（図21）。駱駝のコブに挟まった我々は、キャラバンと共に東西を行き交う文物や思想、文化について想うのであった。

充実した日の夕食はまた格別であった（図22）。

最終日、そして日本へ（結びとして）

玉門関跡（図23）、漢代の長城跡（図24）を見学。午後には空港へ。敦煌から西安（図25）、そして上海へ。翌日、上海から日本へのフライトである（図26）。4月5日（金）12時35分、全員無事に帰国した。

研究院との交流会では、自国の芸術文化を守りさらに発展させるため、他の文化を国境に阻まれない人類の視点で広く俯瞰し学ぶことの大切さを実感した。そして何より会うことの素晴らしさである。是非またお会いし、学びの機会を共有したい。

註

1　大雁塔、兵馬俑抗、敦煌莫高窟、玉門関、長城は世界遺産に登録されている。

（あらき・けいしん　日本画専攻／文化財保存学）

（2019年11月7日　受理）

図1　安定門からの風景
市内を囲む明代の城壁が長く続く

図2　慈恩寺　中央遠方に大雁塔が見える
前方には玄奘三蔵像

図3　秦始皇兵馬俑博物館入場口

図4　銅車馬展示館　中には二機の銅車馬が
展示されている

図5　莫高窟の映像館　早朝開館を待つ

図6　莫高窟の風景　窟への移動は階段を登り降りするので、足が徐々に重くなる

図8　記念碑　1961年全国重点文物保護単位に登録された際のもの　ちなみに、ユネスコの世界遺産には1987年の登録

図7　九層楼　楼内には高さ34.5mの北大像が鎮座する

図9　見学した窟は見学順に、24窟、328窟、16窟、420窟、427窟、428窟、57窟、259窟、257窟、249窟、237窟、96窟、220窟、105窟、148窟、332窟、324窟、63窟である。特に、57窟と220窟は日本国内でもよく紹介される貴重な壁画で、好機を頂いた。

図10　見学風景　階段で足は重くなったが鑑賞したくて懸命に歩む

図11　敦煌研究院正面

図12　中央 韩卫盟先生、右 明慧先生、左 筆者

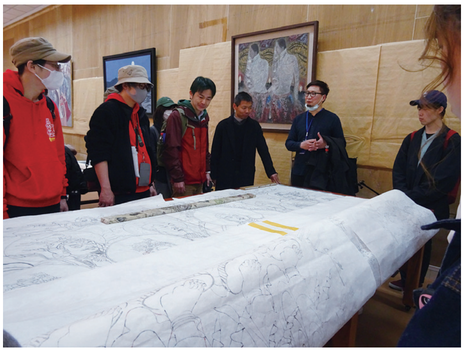
図13　研究院見学　壁画の模写を見学　後方の壁面には研究者の作品が展示されている

図14　交流会の風景①　図録をいただく

図15　交流会の風景②　プロジェクターを使って本学日本画専攻を紹介

図16　交流会の風景③　韩卫盟先生のご発表による研究院の紹介

図17　交流会の風景④　模写制作の様子が映し出される

図18　交流会の風景⑤　全員で記念撮影

図19　鳴沙山　砂が鳴くような音と共に風に飛ばされることで知られる

図20　月牙泉　三日月型の泉があり古来オアシスである

図21　駱駝に乗る　キャラバンを体験

図22　夕食の風景　日本では味わえないメニューも美味しく食す

図23　玉門関跡見学風景　漢族の西域攻防の重要な関所だった

図24　漢代長城跡　版築による長城は約2000年の風化に耐えてのこっている

図25　西安空港の風景　地元で人気の麺を食す

図26　上海浦東国際空港の風景　帰国便に搭乗